

INTERVIEW

建築の外側で見つけた 本当の自分。

高橋義明 [46期]



photograph by zuhn choi

高橋義明 Takahashi Yoshiaki
『MEN'S NON-NO』専属モデル/俳優/二級建築士
1989年生まれ。2013年武蔵野美術大学建築学科卒業。
在学中より『MEN'S NON-NO』専属モデルとして活躍するほか、俳優、アーティストなど多方面で活動を展開。主な作品に、【映画】『白河夜船』、【雑誌】『MEN'S NON-NO』専属モデル、【デザイン】『URBAN RESEARCH』ポップアップストアなど。



左:表参道のGYREで開催されたショートムービー「in time」の展示会場構成。
右:熱海で行ったワイヤーを使ったインスタレーション作品。

2011年、大学在学中に『MEN'S NON-NO』の専属モデルとして活動を開始し、2015年には吉本ばなな原作の映画『白河夜船』でスクリーンデビュー。モデルとしても俳優としても注目を集めていますね。在学中、建築家になることを夢みながらも、モデルの世界に入っていった経緯を教えてください。

当初はモデルになるなんてことは考えてもいませんでした。高校時代から“家”というものに関心があったこともあり、建築学科に入りました。ただ、2年生頃から「建築ってなんだろう?」という、誰もが抱くような答えのなさそうな問いにぶつかって……。ちょうどその頃、土屋公雄先生が仰っていた「家というのは、人の存在がなくなった途端に体温がなくなるんだ!」「建築の外側から建築を見るんだ」という二つの言葉が今でも心に残っています。その言葉のおかげで、忘れかけていたもの—— 建築という言葉を知らないまま純粋に建築に触れていた時の感覚を思い出したんです。

僕が惹かれていたのは“ありのまま”の世界。そこにいる人々や、そこに流れる時間。かつて関心があった“家”にはそういうものが満ち溢れていました。だけど、それを建築の枠だけで捉えようとするとどこことなく窮屈で……。殻を破るじゃないですが、土屋先生の言葉を借りるなら「建築の外側」。僕の言葉で言えば「多くの目線に晒されるマスメディア」。そこに身を置くことで自分の可能性を広げるとともに、異なる角度から建築を見つめ直すことができるのではないかと思います。『MEN'S NON-NO』のオーディションに建築と向き合う中で考えていたことほとんど同じな

マスメディアの中で仕事をしてみた感想は?

専属モデルになって、とても大切なことに気が付きました。それは、自分一人では何もできないということ。「雑誌」というメディアについて言えば、編集者がいて、カメラマンがいて、それを紙面に落とし込むデザイナーがいて—— 僕がいる。作品を作る時も同じ。場所を与えてくれる人がいて初めて成立する。すべて人との繋がりがなくて成立しないんだと実感しました。メディアが美術大学の建築学生をどのように捉えているのか? 僕という存在をどのように編集し、社会に発信するのか? ということは僕としても大変興味深いことだったので、在学中から雑誌というメディアの世界を知ることができたのは非常に良い経験になりました。

正直な話、モデルを始めた頃は違和感しかなく、「こんな自分のじゃない!」とか言って辛くなることもありました。でも、次第に、違和感を持っていた被写体としての自分も、周りから見た本当の自分なんだというのに気が付きました。今は、“被写体としての高橋義明”も胸を張って自分自身だと言えます。

俳優については、まだスタートラインに立ったばかりですが……ひとつだけ言えることがあります。当たり前ですが、演技する対象は“人”ということ。たまにレッスンで動物とかもやったりしますが(笑)。なので、その人が、いつ、どんな場所で、どんな人と、どういう時間を、どういう気持ちで過ごすのかということは常々意識しています。でも、これって、武蔵美時代に建築と向き合う中で考えていたことほとんど同じな

んです。建築って建物のことだけでなく、周辺環境や気候、土地のコンテキスト、クライアントのバックボーンなど建築の周辺や背景にあることを丁寧に読み解くわけじゃないですか。俳優も同じなんです。その人を演じるなら、その人の背景や身の周りを理解する必要があるし、その人の生活を考察しないといけない。今はそういうことを考えて俳優というものを模索している最中です。

『MEN'S NON-NO』でも「DIY特集」のようなページが組まれたりしていますが、モデルや俳優の仕事に武蔵美でのクリエイションの経験が生かされているんですか?

はい。もちろん生かされています。一番大きいのは、メディアで特別に美術や建築をテーマにしたページを設けてもらえることです。僕が美術大学で建築を学んでいなかったら作られることはないでしょうから。誌面では、僕が良いと感じたものを嘘偽りない自分自身の言葉で紹介していますが、それは先生や助手の方々、友人たちとの時間あつてのことなんです。

これは抽象的な言い方になってしまいますが、今の自分というのは、言い換えれば、それまでの経験の蓄積の集合体? 塊? みたいなものだと思うんです。なので武蔵美での経験は、自分自身のパーソナリティーやオリジナリティーを作り出す上での重要な要素になっていることは間違いありません。

最後に、今後の目標を教えてください。

一番の目標は、自分の“家”を自分で建てること。ただ、箱物を作るという意味ではなく、人生の中の拠り所となる場所を築きたい。どんな場所で、周りにはどんな人たちがいるのか? そして、そこにいる人たちとどんな話をしているのか? 今はそういったことに想いを馳せていますが……いつか、その理想の“家”を実現させたいです!

ありがとうございました。

TOPICS

子供たちの笑顔が 地域に活力を与える。

佐藤ジュンスケ [44期]



上:大学生と小学生の交流風景。よく飛び紙飛行機を制作。
下:子供たちの笑顔の為に始めた、地域での夏祭り。

佐藤ジュンスケ Sato Shunsuke
「僕らの夏休みProject」代表
1987年生まれ。2011年武蔵野美術大学建築学科卒業。ITベンチャーでプロデュース業務に従事しつつ、「僕らの夏休みProject」代表を務める。同プロジェクトで2013年の「KIDS DESIGN AWARD」を受賞。ほかにも同プロジェクトに関する絵本『僕らの大きな夢の絵本』(竹書房)を出版するなど東北復興に関する精力的な活動を展開する。

子供たちにとびっきりの夏休みを届けたい——。

3月11日「東日本大震災」。経験したことのない未曾有の大災害に世の中が混乱していた時、私の頭の中にはそんな想いがよぎっていた。

幼少期、夕方のチャイムが鳴ると今まで一緒に遊んでいた友達は親や兄弟に手を引かれて家路につく。そんな中、母一人子一人の母子家庭で育った私は、一人で家に帰る寂しさを感じずにはいられなかった。そんなことを思い返すと震災で家族を失った子供たちがどんな気持ちで生活しているのか、少しだけわかるような気がした。

そして、気付いた時には、被災地の子供たちに向けたプロジェクト「僕らの夏休みProject」を始めていた。無論、教育やボランティアに携わったことなどなかったが……手探りながらプロジェクトを進めていく中で、子供たちの笑顔を中心としてその地域が元を取り戻していく姿を目の当たりにした。それは、私が学生時代に思い描いていたハードの枠に捉われない「ケンチク」そのものだった。そこに求められているのはコンセプトでもなければ、図面でもない、純粋な気持ち。人々が能動的により良い未来を築こうとブリコラージュすることで、周囲を巻き込み感動を伴う「ケンチク」が生まれると確信した。

「僕らの夏休みProject」は5年目の夏を終え、1年目から言い続けていた「最低でも10年」のうちの半分が過ぎた。25名の学生が200名になり、1校だった参加小学校が15校にまで増えた。ここに至るまで5年もかかってしまったが、着実に笑顔の数は増え、地域が変わろうとしている。

ただ、課題も少なくない。この変化を途絶えさせよう持続可能な仕組みとして構築していくということ。資金的課題を解決しつつ、生活環境の中に自然のものとして組み込むためのインフラづくりも必要だ。特別な組織や労力を必要としない、いわば自然発生的な循環をつくれたらと思う。そして、最終的には、この活動に参加した子供たちが大きくなった頃、さらに次世代の子供たちに寄り添ってけるような未来を築いていきたいと考えている。

INFORMATION

2015年度日月会企画イベントの報告

小林 敦 Kobayashi Atsushi
事務局長 [18期]

4月18日 | フォルマ・フォロセミナー 第11回 「歴史と建築の間で」

木岡敬雄 [15期]/竹林舎建築研究所代表
司会進行:岩岡竜夫 [16期]/東京理科大学教授
対談:大嶋信道 [17期]/大嶋アトリエ代表

7月11日 | 日月会建築賞

太陽賞:「反転のうずまき」羽根田雄仁
満月賞:「トレンチのフォリ」平川凌成
三日月賞:「Kichijoji Contemporary Museum」山田陽平
新月賞:「鎌倉子ども館」荒木愛香
七夕賞:「ヒマラヤ」寺田篤実
審査委員長:内海 聡 [34期]/内海聡建築設計事務所代表
審査委員:藤原成暁 [11期]/ものづくり大学教授
笹口 数 [20期]/美術作家
新庄哲平 [39期]/家具デザイナー
西村 萌 [40期]/KAJIMA DESIGN勤務

10月25日 | ホームカミングデー・日月シンポ第7回 「建築とケンチク〜50周年記念出版をめぐって〜」

ご挨拶

酒向 昇 Sakou Noboru
日月会会長 [21期]

会員の皆様、昨年の日月会は「掛川城天守・大洲城天守」などの復元設計に関する木岡敬雄さんをお迎えした「フォルマ・フォロセミナー」を皮切りに、「進路相談会」「日月会賞」「日月進歩」など恒例のイベントを開催しました。「日月会賞」では、学生のモチベーション向上のため一昨年より研究室と協力し公開審査を試行するなど、企画内容の充実を図りました。3年前期の課題を対象に卒業生が講評・採点を行い各賞を与える同賞は、他校にはない武蔵美独自の企画です。学生内でも認知度が高まってきているようで、学生が自主的に企画する賞も併設されるなど盛り上がりを見せています。

例年、芸祭期間中に「ホームカミングデー」と合わせて行っていたシンポジウム「日月進歩」は、昨年に引き続き校友会主催の「サロシ風月」で開催。「50周年記念出版の総括」をテーマに、執行部が1年をかけて卒業生たちと追いかけてきた「設計

パネラー:白田桃子/武蔵野美術大学建築学科研究室助手

「地平線を超えて」(研究室編)編集
尾内志帆 [39期]/株式会社慶應学術事業会
「設計課題を語る」(日月会編)編集
山道雄太/株式会社フリックススタジオ
上記2冊の編集協力
金子祐介/建築史家「設計課題を語る」編集協力
小倉康正 [18期]/武蔵野美術大学非常勤講師
「日月シンポ」1〜6回まで司会

司会進行:小林敦 [18期]/武蔵野美術大学非常勤講師

12月20日 | 実測学校

民間・個人住宅レベルの歴史文化遺産としての建築物の保存活用を応援し、また実測を通じて学生と卒業生との交流を目的として、朝比奈ゆり(18期)、小倉康正(18期)、田邊寛子(31期)、中村文美(33期)、寺坂桂子(34期)をコメンターとして発足。今年度は、昭和初期に建てられたN邸(東京都品川区)を実測。12月17日(木)には、鷹の台キャンパスで、学生に向けた実測のガイダンス及びワークショップを開催。その結果、実測当日には学生18名の参加があった。

ご挨拶

酒向 昇 Sakou Noboru
日月会会長 [21期]

課題」について意見が交わされ、芦原義信先生が作られた「設計計画」の文脈の中で、これからも議論が続けて行くことの必要性を改めて実感した次第です。

恒例行事に加えて行っている「フォロ」と呼ばれるサークル活動で代表幹事会である「プレフォロ」は、5期毎の卒業生を集めて当時の学校生活を聞く会を開催しています。歴史的建築探検を中心に、街歩きを開催している「歴史フォロ」「復興支援の311フォロ」などが鋭意活動中。これらの活動はホームページやメルマガで告知いたしておりますので、是非ご覧頂き積極的にご参加ください。

私が会長を拝命して3年が経ちました。これからも執行部のメンバーと協力し、武蔵美建築・日月会を盛り上げて行きたいと思います。会員の皆様、研究室の益々のご協力・ご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

Forma-Foro

16 フォルマ・フォロ | 武蔵野美術大学建築学科・日月会
MAR.1.2016 | VOL.16



上・下:「日月会建築賞」審査風景。

【表紙写真】
都市を記録する真壁智治氏(第14回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展)photo:佐々木 光

【編集後記】
今号の『Forma-Foro』から、編集・デザインが新体制になりました。諸先輩編集者・デザイナーが積み上げてきた冊子に敬意を払いつつ、マイナーチェンジを図ったリニューアル号になります。ぜひお楽しみください。【JT】

今号特集では若い世代の方々に是非読んでいただきたい内容となりました。在校生、卒業間もない武蔵美関係者もお手元にとていただければと思います。【KT】

編集:瀬澤純希、竹島良人
デザイン:小田権史
印刷:株式会社山田写真製版所
発行:武蔵野美術大学建築学科
同窓会・日月会
http://www.nichigetsukai.com
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内



第14回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 70年代のルーツを探り、日本建築の100年を読み解く

2014年に行われた「第14回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展」の内容

を振り返りながら、武蔵野美術大学建築学科の考現学やデザイン・サー

ヴェイを立脚点とした活動が建築界に果たした功績を、出展作家の真壁

智治氏に伺った。



主に70年代に真壁さんが活動をしていらした「遺留品研究所」に関して、我々はお名前はよくお伺いするのですが、どういった経緯で設立され、どういった活動をしていたのでしょうか。また、真壁さんの代表作である「アーバン・フロッタージュ」とはどういうものなのでしょうか。

〔真壁〕武蔵野美術大学で学んだ仲間であった大竹誠氏、中村大輔氏、村田憲亮氏、私によって発足したグループで、磯崎ゼミのゼミ活動の一環として活動を始めました。私たちは磯崎ゼミに由来するので、東京藝術大学などで行われていた、いわゆる歴史的な集落や民家を対象とした「デザイン・サーヴェイ」というものには関心はなく、もう少し都市の文脈の中でヴァンキュラーなものを見るべきであると考え、江東区や墨田区などの下町、あるいは古い同潤会などを見続けていました。同時に秩父の夜祭などの地域における祭などを、時間軸において街がどのように変化していくのかということも調査していました。それらを「アーバン・コミットメント」として位置付けていました。

現在も継続していますが、個人の作品としての「アー

真壁智治（まかべ ともはる）

1943年生まれ。プロジェクトプランナー。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了。同大学助手を経てプロジェクトプランニングオフィス「M・T・VISIONS」主宰。2006年、建築家と取り組む「くうねるところにすむところ」シリーズで第2回武蔵野美術大学芦原義信賞を受賞。主な作品に、「アーバン・フロッタージュ」（住まいの図書館出版局）、「感応」（用美社）など。

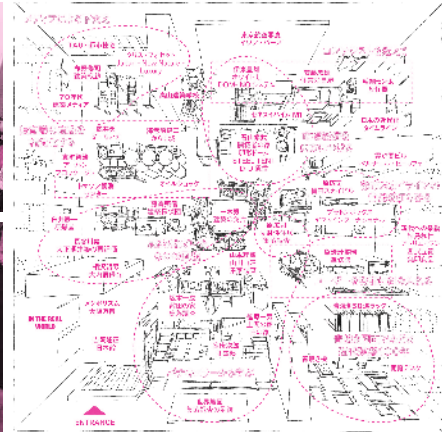
バン・フロッタージュ」はアスファルトやマンホール、横断歩道、壁など都市の中の表面を紙と鉛筆を使ってトレースした作品になります。一見謎めいた活動に思われがちですが、素材の地肌が図版として現れることで都市を身体的な手応えとして捉えることができます。これも都市の解読作業となるものなのです。

――街をリソースとして建築を再発見する潮流という風に考えられていますが、当時自ら街をサーヴェイしていた時は、何を思っておられたのでしょうか。

〔真壁〕建築や構築物など、都市の形成過程を知ることのできる手がかりを「遺留品」と捉え、それらをつぶさに観察・採集しました。街中の看板や標識、注意書きといった、路上に描かれたさまざまなサインなどに着目し、それを優劣の差なく並列することで、普段は見見過ごしているそれらのものの中から、微妙な差異を調査することで、それを見る者と、見られる物の関係性を探っていました。それは同時に、都市や風景を観察する手法として当時盛んに行われていた「デザイン・サーヴェイ」に対する批評的眠差しでもありました。都市のリサーチを通じて、普段何気なく見



中谷礼に研究所のアーカイブで展示された「アーバン・フロッタージュ」。



さまざまな展示物の位置関係が計算されたオーガナイズーション。展示計画は小林恵吾のさまざまなアイデアが展示体験に組み込まれた（引用：建築雑誌2014年9月号）。



第14回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館「倉」を見おろす。

ているだけの看板や広告などの存在が、それを見ている人間の眠差しを通して、人の心理にいかに影響を与え、人間の行動をどのように左右しているのかを考えていました。つまり、それらを「構えとしての表現」として捉え、感覚を研ぎ澄ましていかなければ、我々は自分たちが都市に飲み込まれてしまうという問題意識を投げかけていました。40年以上前から今も変わらず日常に対してそういった問題意識を投げかけ続けています。

――第14回ビエンナーレで、中谷礼に研究所のアーカイブの中に真壁さんの「アーバン・フロッタージュ」が含まれていました。当時を見ていない世代からすると60～70年代のフロッタージュなどの活動が当時のムーブメントの中心という実感があまり湧かないのですが……。

〔真壁〕ビエンナーレに出展するきっかけとしては2013年に広島現代美術館で「路上と観察をめぐる表現史――考現学の「現在」』という展示会が開催されたことが一つのエポックになっていると思います。

民俗学研究者や建築学者など、さまざまな肩書きを持つ今和次郎と吉田謙吉が始めた「考現学」を出発点に、現在まで続く路上観察をめぐる表現の展開を、民俗学、建築評論、アート作品など多様な実践を通じて、過去から現在まで時間を横断しながら紹介する展覧会でした。岡本太郎、コンペイトウ、遺留品研究所と続き、赤瀬川原平、藤森照信、そしてアトリエ・ワンまで続く出展者による路上を観察・収集し意味付けしてきた者たちの系譜です。更に武蔵野美術大学の油絵学科出身の大竹伸朗氏も参加していたこともあり、アートと建築を一つに束ねた展覧会となりました。その中でも「アーバン・フロッタージュ」は身体性の露呈だけに70年代を示す格別な存在感があったのではないのでしょうか。アトリエ・ワンはバブル経済が崩壊した後のサーヴェイですが、彼らと黒田潤三氏の「メイド・イン・トーキョー」を見た時、私たちは遺伝子がつながったと感じました。現代のサーヴェイを受け継いでいるのはアトリエ・ワンとっていいでしょう。その流れで時代が70年代を向いてきたと言えるかもしれません。

2015年のビエンナーレは、「モダニズム100年」をテーマにレム・コールハースが全体のディレクションを

しましたが、日本館の展示では100年という時間の中で70年代が一つの節目になっていると考えました。つまり、モダニズム100年を大きく捉えられるターニングポイントが70年代であったということなのです。今70年代の建築の活動が脚光を浴びるのはそのような局面があるからです。

――最後に第15回ヴェネチア・ビエンナーレに出展を控える武蔵美関係者が多数在籍しています。武蔵美に対する思いをお聞かせください。

〔真壁〕先ほどお話しした広島での開催したレセプションパーティーでは藝大関係者、早稲田関係者だけではなく武蔵美関係者が多数いました。なんと表現したらいいかわかりませんが、アカデミックさではなく泥臭いような力強さを感じ、武蔵美には時代に対する表現を熱心に考えている人が多いと思いました。こういった力強さを前面に出して60～70年代に見られた大きな「ムーブメント」を改めて引き起こして欲しいと思います。

――ありがとうございました。

第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館「縁」展示に向けて

第14回の日本館展示は1970年代にフォーカスした展示を行った。それに対して第15回は、その

時代以降に生まれた世代が主役となった、対照的な展示となる。総合テーマは「REPORTING

FROM THE FRONT」。日本が掲げたタイトルは「en(縁):beyond-SHARING」。出展を控

えた武蔵野美術大学建築学科講師3名は、このテーマに何を思い何を考えたのか――。



青木弘司（あおき こうじ）

1976年、北海道生まれ。北海学園大学工学部建築学科卒業後、2003年に室蘭工業大学大学院を修了。藤本社介建築設計事務所を経て、2011年、青木弘司建築設計事務所設立。藤本社介建築設計事務所在籍中は、創設期から約8年にわたり、大小さまざまなプロジェクトに関わる。2012年～ 武蔵野美術大学非常勤講師、2013年～ 東京造形大学非常勤講師、2014年～2015年、東京理科大学非常勤講師、2015年～ 東京大学非常勤講師。

ヴェネチア・ビエンナーレという国際的な大舞台で、何を訴えることができるのだろうか。

今を生きる建築家として、そのスタンスが問われていると強く感じます。日本館のテーマは「縁」です。ひとまず「縁」という言葉は「関係性」と言い換えても良いと思いますが、この「関係性」というキーワードを切り口に、12組の出展作家の実践を取り上げることで、社会が抱えている問題を浮き彫りにしつつ、全

体として、ある共通した創作のアジェンダを導き出すことができると考えています。

私は〈調布の家〉という、木造住宅のリノベーションの作品を出展します。同作品は、空間を形づくる、あらゆる雑多なモノを等価に捉えながら、それらの関係性を緻密に織り上げるように設計しています。この時住み手は、持続的に空間に関わりながら、その無数の関係性を再編し、断続的に立ち現われるシーンとして受容していきます。このように、その場の質が人間の主体性によって日々刻々と変化するような、いつまでも瑞々しく新鮮な、冗長性に溢れた空間を設計したいと考えました。

今日、我々の実践の舞台はいわゆる大文字の建築が信頼性を失いつつある社会です。たしかに「関係性」に注目することは、少しナイーブな態度のようにも受け取られると思いますが、それでも、さまざまな社会の問題に真摯に向き合う我々の実践を俯瞰していくと、今の時代が要求するアジェンダを探り当てることができるはずです。そして、この展覧会を通して浮かび上がったアジェンダから、建築の新しい自律性が紡がれていくことを、私自身も期待しています。



常山末央（つねやま みお）

1983年、神奈川県生まれ。2005年、東京理科大学工学部第二部卒業。2006～2008年、スイス連邦政府給付生。2008年、スイス連邦工科大学ローザンヌ校修士課程修了。2008～2012年、HHFアーキテクト（スイス）。2012年、mnmm設立。2013～2015年、東京理科大学工学部第二部補手。2015年～ 同校助教。2014年～ 武蔵野美術大学造形学部非常勤講師。2013年、SD Review入賞。2015年、東京建築士会住宅建築賞受賞。

「中心」という概念の希薄なところでは、たまたま道が集まってくるような場合でも、ちょっとした条件――たとえば既存の敷地の形状とか地形条件次第で道はたやすくずらされてしまう。」pp.78-79「見えがくれる都市」横文彦 他著（1980、鹿島出版会）

横文彦氏は「見えがくれる都市」で、江戸の街路パターンの特性として、交叉部のずれが多く見られる

と、ヨーロッパの放射パターンと対比し、ずれた交叉路からは、機能的な理由とは別の、その形成に関わった人や物、地形などの存在が読み取っています。たとえば交叉する道が必要で、たまたま交叉部がずれてしまっても、粹な富士山の道にしようと考えた。時代の風潮だったのかも知れない。日本のまちは、そういった「たまたま」を許容するところがあります。

大地には、変動と風雨による蓄積があり、農耕に適した平地や、運搬の便のよい海辺など、ちょうどいい場所を見つけて人が定住し、まちは形成されます。その上に建つ建築は、たくさんの物と事、たくさんの人の力や知恵の出会いによって成る。その突拍子もなさ、思いがけない溶け込み、普通でない組み合わせからくる発見があるのです。

「縁」で展示されるのは、そういった建築家が計らずしも出会った物や人、場所に、何を考え、どう反応したかである。それが建築となり、「たまたま」を許容する環境をどう更新していくかです。更に、「人の縁」「物の縁」「地域の縁」と名付けられた3つのテーマを通じて、その先にその建築を使う人、目にする人の主観にどう働きかけたかまで、感じられる展示となって欲しいと思います。



増田信吾（ますだ しんご）

2007年、武蔵野美術大学を卒業後、増田信吾+大坪克巨を共同主宰。2010年・武蔵野美術大学非常勤講師、2015年秋、コーネル大学にて客員教授。主な受賞に鹿島出版会SD Review 2008及び2009入選、JCDデザインアワード2011年及び2014年金賞、イギリスの雑誌主催のAR Award 2011準大賞、2014大賞などがある。

昨年8月から12月の間はアメリカ・ニューヨークにあるコーネル大学でスタジオを任されていたため、大学の近くに住みながらスタジオへと通い、帰ってきてはSkypeを利用して可能な限り東京の事務所とやりとりをしました。

スケッチや図面、CGパースで設計を確認しながら、「こうすればこうなるかも」、「こういう感じ」とか、そんな仮定を組み立てるエスキスは、環境が変わったが

故に、進行の調整はあったにせよ、それなりにスムーズに事が運びました。むしろ時差のおかげではかかったこともしばしば。でも、どうしてもプレゼン前に模型を直に確認ができないスケジュールとなってしまう、Skypeで模型を確認し、プレゼンに臨むことに。模型を回してもらったり、カメラを近づけてもらったり遠ざけてもらったり。そして、そこで僕自身が事務所にいるみんなに発した言葉はとても無責任で、今まで無理なくできていたことは思い込みだと知りました。「そこがこういう感じで、こうなっているかな？ そうなっていればいいと思うんだよね」と、自分で最終的な判断を下せなかったのです。こんなことは初めてでした。今まで事務所へ入り浸り、一緒に同じ場所で考えていることを共有する貴重さと必要性を恥ずかしながら初めて感じました。今は帰国し、ほぼ毎日事務所にいて、ビエンナーレに向けて思考をめぐらせています。期間中、さまざまな国にも行き、とても濃密な数ヶ月でした。さまざまなバックグラウンドの人たちと会ってたくさん話をしました。生い立ちや年齢も全然違う。バラバラな英語レベルで必死に自分がどう思うかを表現していて、その状況はとても感覚的で、僕の頭を柔軟にしてくれる良い経験となりました。



1：調布の家 photo: Anna Nagai
2：不動前ハウス photo: 堀田貞雄
3：躯体の窓 Photo provided: 増田信吾+大坪克巨